

——調査報告——

長尾山の古墳群(IV)

——雲雀山西尾根古墳群B支群の調査——

関西学院大学考古学研究会

I はじめに

関西学院大学考古学研究会の長尾山の古墳群に関する調査研究は、1980年の『関西学院考古』第6号発刊以降中断したままであった。急激な会員の減少もあって、ここ数年は行政発掘調査への参加が活動の主要部を占めるようになっていた。

ところが、この2年のうちに会員の数も倍増し、これまでの行政発掘調査への無批判な参加という状況を真摯に総括した結果、①会独自の調査研究活動が本来の研究会活動であり、②行政発掘への参加は、あくまでも未調査での破壊をさけるための最終手段であり、③これまでの調査をふまえた上で、付近の文化財パトロールを実施し、保存にむけて働きかけをする、という3点を確認した。そこで以上の点の上にたち、中途半端な状態になっていた長尾山の古墳群の調査・研究に取りくむことになった。

当研究会は、研究活動の対象地域を大学近郊の西摂平野に求め、1975年度には仁川流域の後期古墳、1976年度よりは長尾山丘陵に所在する後期古墳の実測調査を主体とした報告を行ってきた。

長尾山の古墳群については過去3回にわたり報告してきたが、今回は第6号において課題として残された兵庫県宝塚市雲雀山西尾根古墳群B支群の未調査古墳について、一連の研究活動の一環として報告するもので、特に①長尾山の古墳群における当古墳群の性格解明のための基礎資料づくり、②保存推進のための現状実測調査、の2点を念頭に置いた。

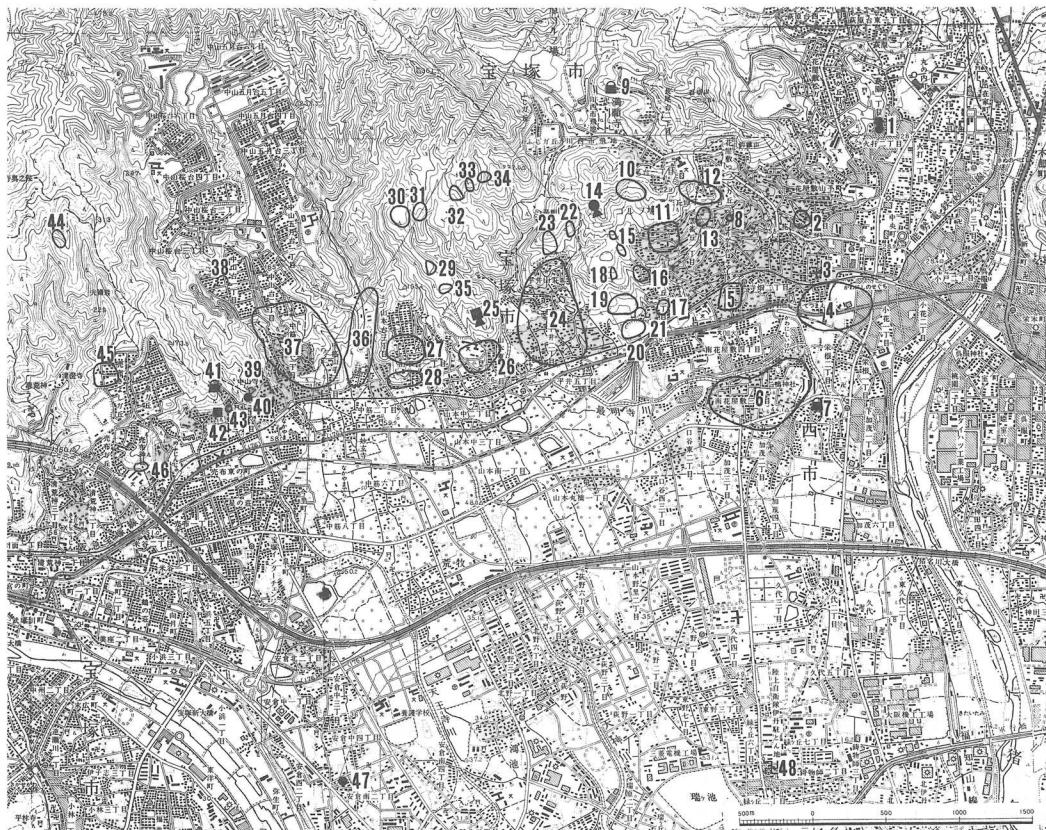


第1図 長尾山の古墳群の位置

II 長尾山丘陵周辺の環境

(1) 地理的環境

兵庫県南東部と大阪府北西部に含まれる西摂地方は、北は北摂山地、東は千里丘陵、西は六甲山系に囲まれ、南は大阪湾に面している。この平野の東部には猪名川、西部には武庫川の二つの河川が南流し、その間には標高5mから40mにかけて広がる洪積台地である伊丹段丘が形成され、



第2図 雲雀山古墳群周辺の遺跡

- | | | |
|-----------------|-----------------|--------------|
| 1 勝福寺古墳 | 17 雲雀山東尾根古墳群C支群 | 33 山本奥古墳群F支群 |
| 2 豆坂古墳群 | 18 雲雀山西尾根古墳群A支群 | 34 同 G支群 |
| 3 栄根寺 | 19 同 B支群 | 35 同 H支群 |
| 4 寺畠遺跡 | 20 同 C支群 | 36 中筋山手東古墳群 |
| 5 栄根遺跡 | 21 平井窯跡 | 37 中筋山手古墳群 |
| 6 加茂遺跡 | 22 平井古墳群A支群 | 38 勅使川窯跡 |
| 7 栄根銅鐸出土地 | 23 同 B支群 | 39 中山寺 |
| 8 雲雀丘皇朝錢出土地 | 24 同 C支群 | 40 中山寺白鳥塚古墳 |
| 9 満願寺 | 25 長尾山古墳 | 41 中山莊園銅鐸出土地 |
| 10 雲雀丘古墳群A支群 | 26 山本古墳群A支群 | 42 中山莊園古墳 |
| 11 同 B支群 | 27 同 B支群 | 43 北米谷骨蔵器出土地 |
| 12 同 C北支群 | 28 同 C支群 | 44 旧中山遺跡 |
| 13 同 C南支群 | 29 山本奥古墳群B支群 | 45 旧清遺跡 |
| 14 万籾山古墳 | 30 同 C支群 | 46 壳布神社銅鏡出土地 |
| 15 雲雀山東尾根古墳群A支群 | 31 同 D支群 | 47 安倉高塚古墳 |
| 16 同 B支群 | 32 同 E支群 | 48 伊丹廃寺 |

その南には両河川の運ぶ土砂によって形成された沖積平野が広がっている。

長尾山地とは、西摂平野の北辺をなす北摂山地のうちの猪名川以西をいい、標高50mから最も高い大峰山頂でも552mと比較的緩やかな丘陵である。この山地を源とする河川として最明寺川・天神川・勅使川があり、最明寺川は猪名川と、天神川・勅使川は武庫川と合流する。また、この山地の南斜面の標高50mから200m付近には約200基の古墳があり、その大部分は宝塚市域に含まれている。今回の調査地域は、そのうちの最明寺川と猪名川にはさまれた雲雀山の西尾根に存在する古墳時代後期の群集墳である。

(2) 歴史的環境

西摂地方は、地理的環境に恵まれていたため歴史は古く、旧石器も採集されているが、ここでは長尾山丘陵周辺の弥生時代以降に限り、その概要を述べる。

弥生時代の集落遺跡としては、前期には川西市栄根遺跡^①が出現し、中期には川西市加茂遺跡^②など大規模な集落が出現する一方、宝塚市旧清弥生遺跡^③のようないわゆる「高地性集落」も出現する。後期になると、前時期から継続する栄根遺跡・加茂遺跡のほか、川西市寺畠遺跡・久代遺跡など小規模な集落が増加する傾向がみられる。なお、この時代の遺物としては、宝塚市中山で外縁付鉢式の同范鐸^④が2口、川西市満願寺・栄根^⑤において突線鉢式の銅鐸^⑥がそれぞれ1口ずつ出土^⑦しているほか、宝塚市壳布神社境内において銅鏡^⑧が出土している。

古墳時代に入ると、前期に出現するものとして宝塚市万籬山古墳があげられる。また、吳の紀年銘をもつ半円方形帶神獸鏡^⑨が出土した宝塚市安倉高塚古墳^⑩もこの時期のものと考えられている。中期に入ると、それまで主として丘陵尾根上につくられていた古墳は、台地あるいは平野部に移行し、西摂地方全体ではかなり広範な地域で造営されるようになるが、長尾山丘陵周辺では中山寺境内に「安産の手洗鉢」と称する舟形石棺^⑪が遺存するのみである。なお、前方後方墳とされている宝塚市長尾山古墳^⑫については、前期とも中期ともいわれている。後期になると、川西市勝福寺古墳^⑬が西摂地方における横穴式石室墳として比較的早く出現した後、長尾山の南斜面には数々の群集墳が築造されはじめる。その東端は既に破壊された川西市豆坂古墳群^⑭で、最明寺川以東にはこのほか雲雀丘・雲雀山東尾根・雲雀山西尾根・平井の4古墳群、最明寺川と天神川に画された地区には山本・山本奥の2古墳群、天神川と勅使川に画された地区には中筋山手^⑮・中筋山手東^⑯の2古墳群がそれぞれ分布している。また、中山寺境内には白鳥塚古墳^⑰が、その西には八角形墳^⑱である中山莊園古墳^⑲が単独墳として存在する。古墳時代の集落遺跡としては、弥生時代から続く加茂遺跡・栄根遺跡があげられる。栄根遺跡では1982年に自然河川より古墳時代の木舟が出土している。

歴史時代に入ると、宝塚市域では平井・勅使川に窯^⑳が築かれ、伊丹廢寺^㉑などに須恵器が供給されたのではないかと考えられている。また、北米谷では骨蔵器が出土しており、把手付平瓶の須恵器や和銅開珎^㉒が伴出していることから8世紀初めのものと考えられている。寺院では、中山寺は古い開基^㉓であると伝えられているがその実情は明らかではないのに対し、「清荒神」清澄寺はその旧跡として平安時代後期の寺院址（旧清遺跡）^㉔が検出されている。また、この時代の出土遺物としては、雲雀丘の皇朝鏡^㉕、平井の向鳥双龍文の八稜鏡^㉖がある。川西市域では、栄根遺跡で平

安時代から室町時代にかけての建物跡などが発掘されているほか、自然河川より奈良時代の墨壺も出土している。寺院としては、白鳳時代の瓦が出土している栄根寺があるが、現在は平安時代の薬師如来像を安置する薬師堂があるのみである。また、平安時代頃に創建された満願寺では室町時代初めに建立された建物跡より地鎮具が出土している。^{③②} ^{③③} (森澤)

＜註＞

- ① 兵庫県教育委員会・川西市教育委員会『栄根遺跡』 1982年
- ② 『摂津加茂』(関西大学文学部考古学研究紀要第3冊 1967年)
川西市教育委員会『川西市加茂遺跡』1982年
- ③ 『摂津旧清遺跡』(宝塚市文化財調査報告第5集 1973年)
- ④ 『宝塚市中山出土の銅鐸』(宝塚市文化財調査報告第8集 1976年)
- ⑤ 亥野 疊「考古資料」『川西市史』第4巻 1976年)
- ⑥ ⑤に同じ
- ⑦ 京都大学文学部編『京都大学文学部博物館考古資料目録』1 1960年
- ⑧ 梅原末治「摂津万籾山古墳」『日本文化研究所報告』第4 1937年
『摂津万籾山古墳』(宝塚市文化財調査報告第7集 1975年)
- ⑨ 梅原末治「小浜村赤鳥七年鏡出土の古墳」『兵庫県史跡名勝天然記念物調査報告』第14輯 1939年
- ⑩ 梅原末治「中山寺——其ノ境内ノ古代ノ遺跡遺物」『兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告』第17輯 1930年
- ⑪ 檀本誠一「長尾山古墳外形測量調査報告」『兵庫県埋蔵文化財調査集報』第1集 1970年
- ⑫ ⑤に同じ
- ⑬ 大久保基夫「摂津川辺群の三古墳群を実測して」『古代学研究』21・22合併号 1959年
石野博信「宝塚市長尾山古墳群」『兵庫県埋蔵文化財調査集報』第1集 1970年
- ⑭ 岡野慶隆「川西市花屋敷出土の須恵器」『兵庫考古』第14号 1981年
- ⑮ ⑬の石野に同じ
『長尾山の古墳群調査集報』(宝塚市文化財調査報告第14集 1980年)
『長尾山の古墳群I』『関西学院考古』第4号 1978年
- ⑯ ⑮の石野に同じ
『宝塚市雲雀山古墳群』(宝塚市文化財調査報告第6集 1975年)
- ⑰ ⑯に同じ
- ⑱ 『平井古墳群分布調査報告書』(宝塚市文化財調査報告第2集 1972年)
- ⑲ ⑰に同じ
- ⑳ ⑯の「長尾山の古墳群I」に同じ
- ㉑ 『中筋山手東2号墳発掘調査報告』(宝塚市文化財調査報告第11集 1977年)
- ㉒ ⑩に同じ

- ㉓ 『中山莊園古墳発掘調査報告書』（宝塚市文化財調査報告第18集 1985年）
- ㉔ 笠井新也「摂津国川辺郡平井山に於ける古代製陶所の遺跡及びその遺物」『考古学雑誌』第5卷第9号 1915年
- ㉕ 高井悌三郎「勅使川窯跡発掘調査概要」『兵庫県埋蔵文化財調査集報』第1集 1970年
- ㉖ 伊丹市教育委員会『摂津伊丹廃寺』 1966年
- ㉗ 末永雅雄「宝塚市北米谷出土の火葬骨蔵器」『日本歴史考古学論叢』 1966年
- ㉘ 現在中山寺の裏山、奥ノ院にのぼる途中に房舎跡かとみられる削平石積のところも2・3存し、山頂に巨石の点在するところもあるが実態は不明である。（③に同じ）
- ㉙ ③に同じ
- ㉚ 梅原末治・角田文衛「摂津川辺郡長尾山に於ける古銭の出土」『西宮』第3号 1946年
- ㉛ ③に同じ
- ㉜ 1985年、川西市教育委員会が発掘調査を実施
- ㉝ 川西市教育委員会『川西市満願寺』 1985年

III 長尾山の古墳群の調査・研究動向

長尾山丘陵に数多くの古墳が分布していることは古くから知られており、ウィリアム・ゴーランドの白鳥塚古墳の調査などをはじめとして明治以来数多くの調査が実施されている。我々関西学院大学考古学研究会においても1976年以後、長尾山丘陵の古墳を対象として調査・研究を行い現在に至っている。

1979年以前に発表された長尾山丘陵の古墳に関する調査・研究については「長尾山の古墳群Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」（『関西学院考古』第4号 1978年 第5号 1979年 第6号 1980年）に詳しいのでここでは省略することにして、1980年以後に発表された調査・研究について述べてみたい。

1974年には、宝塚市教育委員会によって雲雀山東尾根古墳群C支群2号墳の発掘調査が行われた。^① この雲雀山東尾根古墳群C支群2号墳では、横穴式石室の排水施設が認められており、直宮憲一氏は長尾山丘陵の横穴式石室の排水施設について考察されている。

1976年には、宝塚市教育委員会によって雲雀丘古墳群B支群1号墳の発掘調査が行われた。^② この雲雀丘古墳群B支群1号墳の出土遺物には鉄滓や鑿が含まれており、この古墳の被葬者の性格を表わすものとして特筆できよう。この調査に関連して、坂井秀弥氏は古墳時代の鉄・鉄器生産について考察されている。

1978年には、宝塚市教育委員会によって中筋山手古墳群5号墳の発掘調査が行われた。^③ この古墳の石室は、幅80cm、全長4mばかりと推定される小型横穴式石室であり、石室形態からみて7世紀前半の築造と考えられている。

1979年には、関西学院大学考古学研究会が雲雀山西尾根古墳群B支群全体の分布確認及び、6・7・8・9号墳について実測調査を行った。^④ この分布確認では、『宝塚市雲雀山古墳群』に記

載されている10基を確認した上、さらに新しく4基を確認し、11・12・13・14号墳とした。この調査結果を報告した『関西学院考古』第6号で、岡野慶隆氏は長尾山丘陵における横穴式石室を中心^⑥にその平面企画を考察され、「倍数企画法」の使用を推定されており興味深い。

1982年には、浅岡俊夫氏によって平井窯跡について2基の窯体の確認と地形測量の調査報告がなされている。^⑦

同じく1982年には、宝塚市教育委員会によって宝塚市域埋蔵文化財分布調査が行われた。この調査の報告は、『宝塚市埋蔵文化財遺跡分布地図及び地名表』として刊行されている。^⑧

同じく1982年には、白石太一郎氏が畿内の群集墳について、消滅の時期差によって3種類の分類を行われており、7世紀の第3四半期の小型化した横穴式石室やその退化形式の小竪穴式石室を含む雲雀山東尾根古墳群B支群を代表例とするものを「長尾山型」とされている。^⑨白石氏は雲雀山東尾根古墳群B支墳の23基の古墳のA～D型の類型を基本的に年代差を示すものととらえ、7世紀の第2四半期から一部第4四半期まで築造が続けられたと考えられている。

なお、雲雀山東尾根古墳群B支群については、白石氏に先だち、石野博信氏は、この古墳群の年代を7世紀はじめから中葉に至る期間に相等するとして、等高線にそって分布する石室から4つの単位集団を抽出^⑩している。また、岡田務氏は、この古墳群の年代を7世紀前半から中葉にかけてとされ、「戸籍」を基とした集団の抽出の可能性を示している。^⑪一方、水野正好氏は、石室のA～Dの類型は年代差を示すものとし、単位群の存在とともに墓道を想定している。^⑫古墳時代終末期の群集墳を考える上で、雲雀山東尾根古墳群B支群は大変興味深い位置にあるといえよう。

1983・1984年には、宝塚市教育委員会によって中山莊園古墳の発掘調査が行われた。^⑬中山莊園古墳は、飛鳥地方の天皇陵とされる古墳以外では数少ない八角形墳で、築造年代は石室の羨道形態の特異さ等から7世紀第2四半紀初め頃と考えられ、いわゆる飛鳥地方の八角形墳とは性格が異なるものとされている。^⑭地方の終末期古墳を考える上で重要な位置にある古墳であるといえよう。

以上、現在に至るまでの調査・研究動向について述べてみたが、今後さまざまな調査・研究が期待される。

(佐々木)

<註>

① 『長尾山の古墳群調査集報』（宝塚市文化財調査報告第14集 1980年）

② ①に同じ

③ ①に同じ

④ 関西学院大学考古学研究会「長尾山の古墳群Ⅲ」『関西学院考古』第6号 1980年

⑤ 『宝塚市雲雀山古墳群』（宝塚市文化財調査報告第6集 1975年）

⑥ 岡野慶隆「横穴式石室の平面企画について——長尾山丘陵における横穴式石室を中心として——」『関西学院考古』第6号 1980年

⑦ 浅岡俊夫「宝塚市平井窯跡分布調査報告」『大阪文化誌』第14号 1982年

⑧ 『宝塚市埋蔵文化財遺跡分布地図及び地名表』（宝塚市文化財調査報告第8集 1983年）

- ⑨ 石野博信「兵庫県宝塚市長尾山古墳群」『兵庫県埋蔵文化財集報』第1集 1971年
 ⑩ 白石太一郎「畿内における古墳の終末」『国立歴史民俗博物館研究報告』第1集 1982年

	石室形態	大きさ(単位cm)	
		長さ	幅
A型	横穴式	400前後	90~100
B型	"	210~300	60~80
C型	"	190~200	45前後
D型	豊穴式	65~125	35~50

なお、この分類は、石野博信氏による。

- ⑪ ⑨に同じ
 ⑫ 岡田 務「畿内における終末期の群集墳の一形態」『古代研究』4 (元興寺佛教民俗資料研究所考古学研究室 1974年)
 ⑬ 水野正好「雲雀山東尾根中古墳群の群構造とその性格」『古代研究』4 (元興寺佛教民俗資料研究所考古学研究室 1974年)
 ⑭ ⑪に同じ
 ⑮ 『中山莊園古墳発掘調査報告書』(宝塚市文化財調査報告第19集 1985年)
 ⑯ 現在、中尾山古墳、天武・持統陵古墳、舒明陵古墳、天智陵古墳、岩屋山古墳などが八角形墳としてあげられているが、発掘調査によって八角形の墳形が確認されたのは中尾山古墳のみである。天皇陵とされている古墳以外では、広島県新市町尾市1号墳や群馬県多野郡吉井町の神保一本杉古墳などが八角形の墳形を持つ可能性が指摘されている。
 ⑰ 直宮憲一「西摂における終末期古墳の一様相」『末永先生米寿記念献呈論文集』 1985年
 猪熊兼勝「中山莊園古墳と八角形墳」『中山莊園発掘調査報告書』(宝塚市文化財調査報告第19集 1985年)

IV 調査の経過

当研究会は1984年10月13日に雲雀山西尾根B支群の分布確認調査を行った後、未調査の8基及び、新たに確認した1基を含む計9基の現状実測調査を実施した。調査対象とした古墳は、3号墳・4号墳・5号墳・11号墳・13号墳・14号墳・15号墳・16号墳・17号墳である。なお、3号墳、4号墳を除く7基は墳丘実測のみにとどめた。

調査の経過は以下のとおりである。

(奥谷)

調査日誌抄

1984年10月20日

平板ポイント・レベルポイントを設定する。雨のため午後は中止。

10月21日	未設定部分の平板ポイント・レベルポイントを設定する。	3月15日	4号墳及び5号墳付近の地形実測を行う。
10月31日	3号墳の墳丘及び石室の実測を行う。	3月16日	同上
11月18日	13号墳の墳丘実測を行う。	3月20日	17号墳を確認し、付近の地形実測を行う。
11月24日	同上	4月1日	5号墳の墳丘実測を行う。
12月9日	14号墳の墳丘実測を行う。	4月2日	16号墳の墳丘実測を行う。
12月23日	4号墳の墳丘実測を行う。	5月18日	11号墳の墳丘実測を行う。
12月26日	同上	9月2日	4号墳の奥壁、左右側壁の実測を行う。
1985年1月30日	13号墳付近の地形実測を行う。	9月5日	同上、及び4号墳の平面プランの実測を行う。
2月27日	14号墳付近の地形実測を行う。	10月20日	4号墳の石室実測を完成させる。
3月5日	同上	11月10日	各古墳の細部観察を行い、これをもって現地の作業を終了する。
3月6日	15号墳付近の地形実測を行う。		

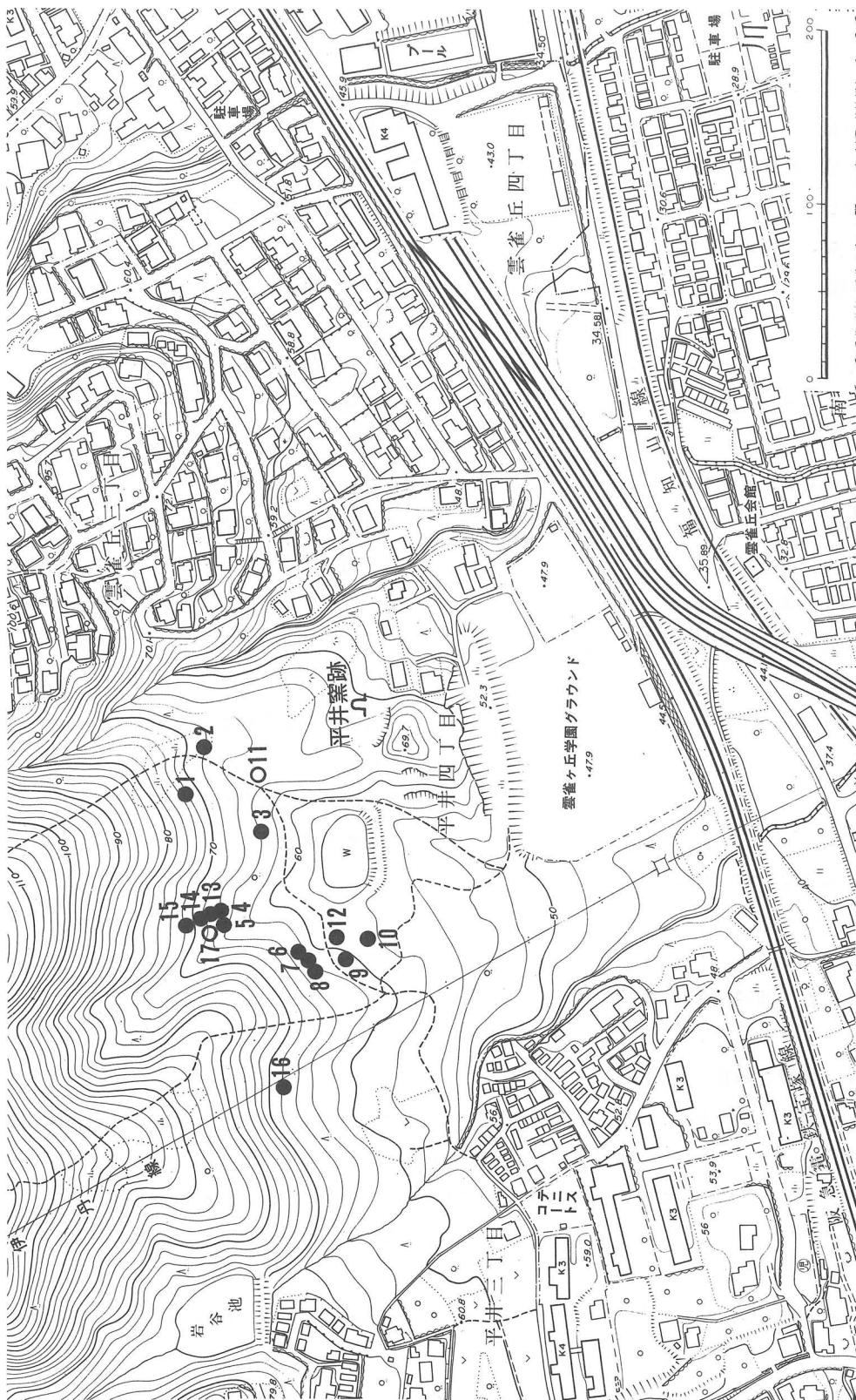
V 調査の概要

(1) 位置と現状

今回の調査対象地域は、長尾山丘陵全体から見れば東部、すなわち最明寺川東方の雲雀山西尾根の中腹部緩斜面、標高55～70m、東西250m南北150mにわたる地域である。行政区画は宝塚市平井4丁目にあたる。雲雀山西尾根古墳群B支群は、北から南にのびる雲雀山西尾根に存在する3支群のうち、その中央に位置する。全体として宅地開発等が行なわれていないため旧地形をよくとどめている。

今回は、B支群のうち東寄りに位置する3・4・5・13・14・15・17号墳と、西端の16号墳の9基について現状実測調査を行った。

実測調査に先だって雲雀山西尾根古墳B支群を踏査し分布状況を再確認した。



第3図 雲雀山西尾根古墳群B支群古墳分布図

分布調査にあたり主に『宝塚市埋蔵文化財分布地図及び地名表』を参考にし、記載されている雲雀山西尾根古墳群B支群の16基全てを確認した。更に分布図15号墳西方に新たに1基を確認し、今回分布図における古墳番号の続きとして17号墳とした。ただしこれは古墳でない可能性もある。(松林)

(2) 古墳の調査結果

(a) 雲雀山西尾根B支群3号墳

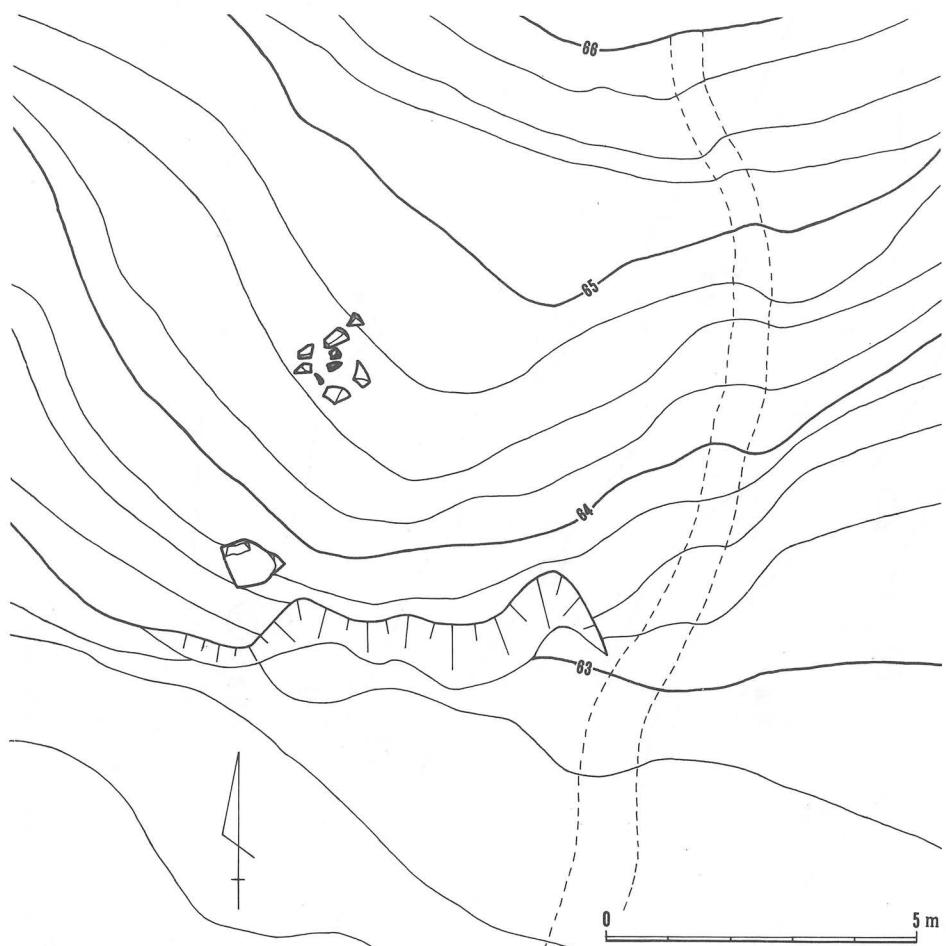
〈墳丘〉(第5図)

当古墳は標高約64mの地点に比較的独立して位置している。

墳丘は封土流出が著しく、墳丘の規模及び形態は不明である。

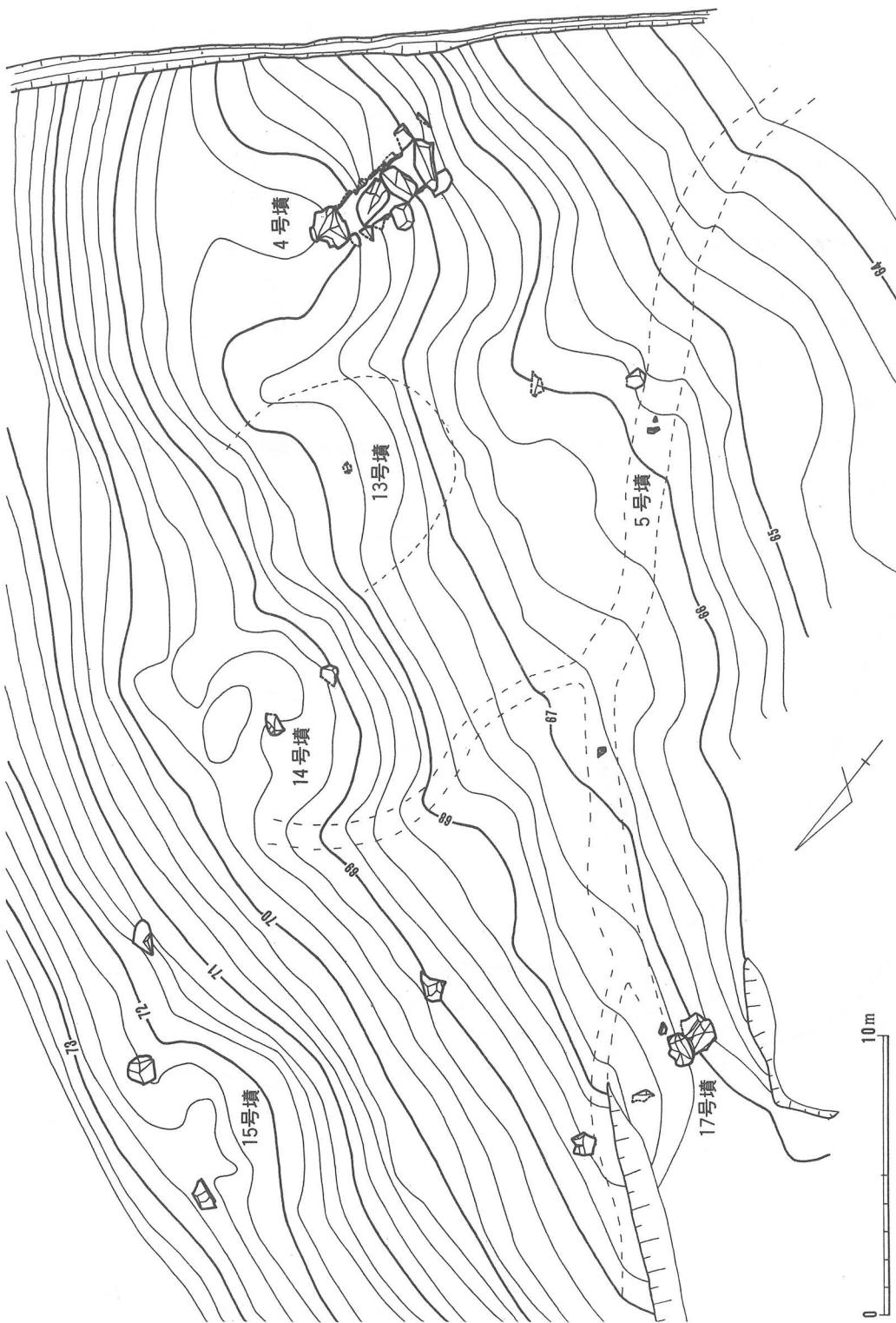


第4図 雲雀山西尾根古墳群B支群3号墳石室実測図



第5図 雲雀山西尾根古墳群B支群3号墳地形実測図

第6図 雲雀山西尾根古墳群4・5・13・14・15・17号墳地形実測図



〈石室〉（第4図）

内部主体は、石の露出状況から見て主軸をほぼN-37°Wにとる約1m×約0.75mの箱式石棺であると思われる。深さについては不明である。なお、少し下方に比較的大きな転石が存在するが、当古墳との関係は不明である。 （白江）

（b）雲雀山西尾根B支群4号墳

〈墳丘〉（第6図）

当古墳は標高約66mに位置し、北から南に延びる尾根の南斜面に築造されている。

墳丘は封土がかなり流出してはいるが、裾部は保存されており、旧状を知ることができる。今回の地形実測調査では、墳径約13mの円墳で、墳丘高は約2.5mであると思われる。

〈石室〉（第7図）

封土の流出により現在天井石一枚が石室に架され、3枚が石室内に落ち込んだ状態で遺存し、側壁も大部分露出している。天井石が落ち込み、側壁の一部が失われているものの石室全体としての残存状態は良好であるといえる。

石室は主軸をN-14°Eにとる右片袖式の横穴式石室である。石室内は天井石も落ち込み、土砂も多少堆積しており、全体の規模等の計測は困難であるため、以下現状での計測値及び表面観察の結果を記す。

石室の平面形は、玄室は胴張りで、袖部もわずかに見られるのみであり、羨道はわずかに裾拡がりを呈する。玄室内の持ち送りは左側壁では見られるが、右側壁ではほとんど見られない。

石室の計測値は、玄室長約3.25m、羨道現存長約1.8m、玄室部での床面からの高さは約2.1mである。石室内の現状での床面の幅は、玄室玄門付近で約1.52m、中央部で約1.43m、奥壁部で約1.32m、羨道幅は玄門付近で約1.35m、現存最端部で約1.40mを測る。

石の構築法は、奥壁は2段目まで大型の石、3・4段目にやや小型の石を横積みし、さらに隙間を人頭大の栗石で詰めている。側壁は使用石材が左右でかなり違っており、左側壁では大型の石からだんだん小型の石へと5～6段に横積みし、隙間を拳大の栗石で詰めている。右側壁では大型のやや扁平な石を3段に横積みし、隙間を人頭大の栗石で詰めている。左右側壁とも天井石の保存されていない部分は、3分の1ないし2分の1の側壁が失われている。 （松林）

（c）雲雀山西尾根B支群5号墳

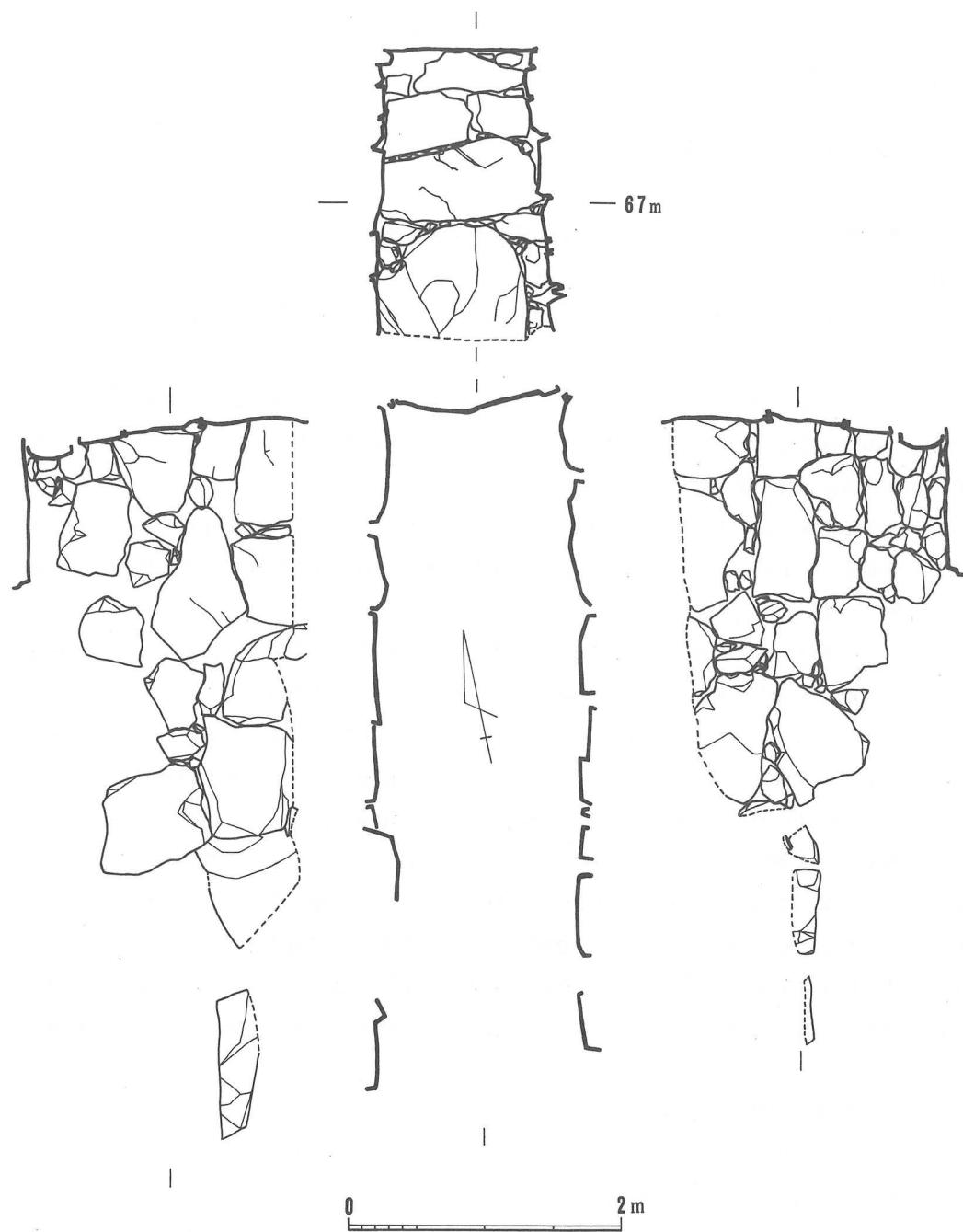
〈墳丘〉（第6図）

当古墳は4号墳の西、標高約65mに位置している。

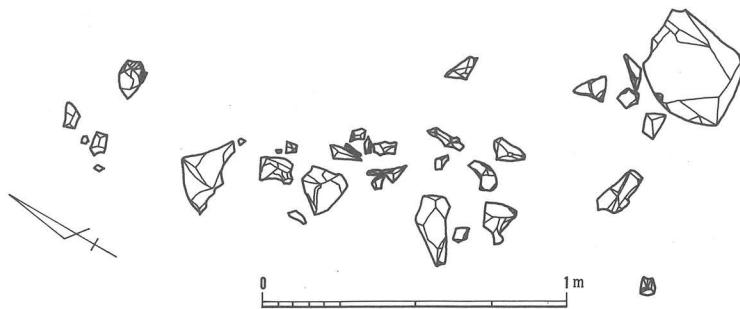
墳丘は全体に削平をうけ、さらに小径がその上を通り、墳丘の規模及び形態は不明である。墳丘の傾斜方向は南である。

〈石室〉（第8図）

石室は人為的改変をうけており、現在大小の石数十個が一部露出するのみである。したがってその規模及び形態は不明である。石の散乱方向は北北西から南南東である。 （田川）



第7図 雲雀山西尾根古墳群B支群4号墳石室実測図

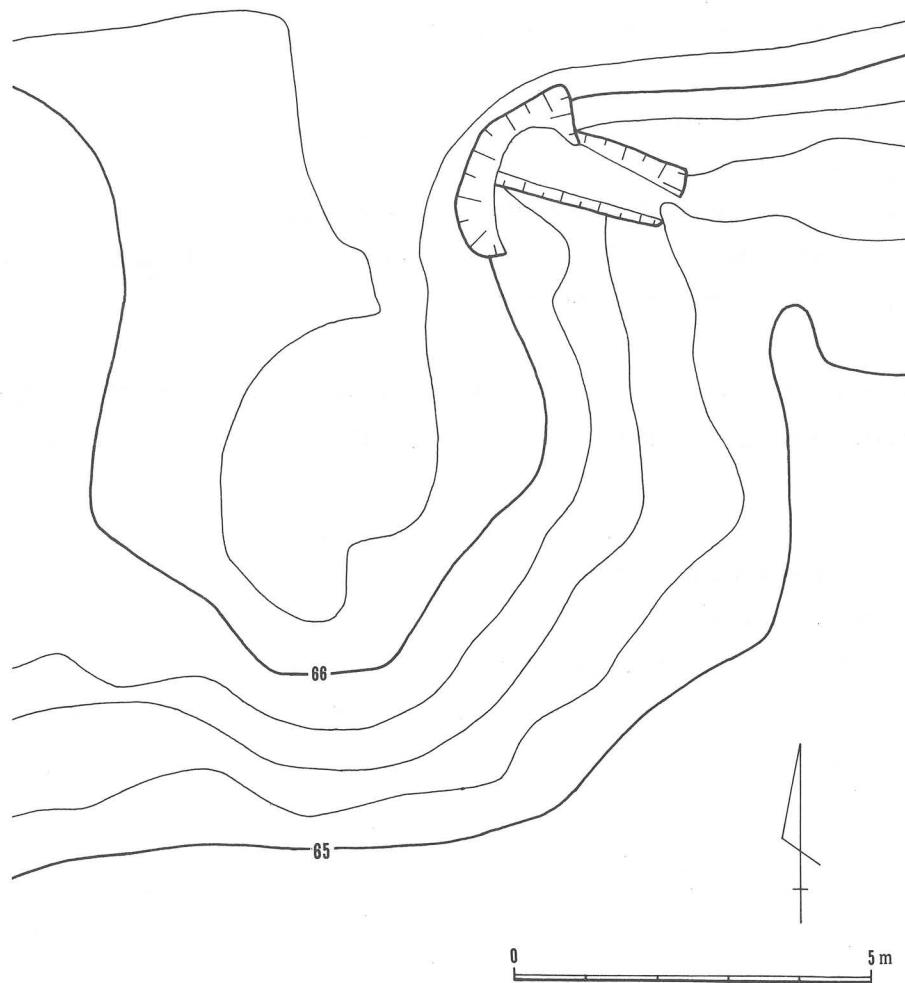


第8図 雲雀山西尾根古墳群B支群5号墳現状実測図

(d) 雲雀山西尾根B支群11号墳

<墳丘> (第9図)

当古墳は2号墳の南南東、標高約65mに位置し、北から南に延びる尾根の南斜面に築造されて
いる。



第9図 雲雀山西尾根古墳群B支群11号墳地形実測図

墳丘は北側・南側で封土の流出がみられ、裾部も削平を受けているが、南側・東側はほぼ旧状をとどめる。今回の地形実測調査によると、径約10mの円墳で、墳丘高約1.4mであると思われる。

＜石室＞

ボーリング棒での探査によったが、内部主体については明確ではない。

(奥谷)

(e) 雲雀山西尾根B支群13号墳

＜墳丘＞ (第6図)

当古墳は4号墳の北西に接する標高約68mに位置している。

墳丘は封土の削平は認められず、ほぼ旧状をとどめている。今回の地形実測調査によると径約7mの円墳で、墳丘高は約1.2mであると思われる。

＜石室＞

墳丘の遺存状態が良好でほぼ完全に封土に覆われており、墳頂に石室を構成すると思われる石がわずかに露出しているのみである。ボーリング棒での探査によって天井石の存在は確認できたが、石室の形態及び規模までは明確にすることはできなかった。

(吉田)

(f) 雲雀山西尾根B支群14号墳

＜墳丘＞ (第6図)

当古墳は北西の15号墳と南東の13号墳の間、標高約67mに位置する。

墳丘は北西が多少削平されているが、よく旧状を保っている。今回の実測調査によると径約10mの円墳で、墳丘高は1.8mであると思われる。

＜石室＞

墳頂にわずかに石が露出しているが、はっきりと石室のものであるとは認め難い。また墳頂付近にはかなり大きな転石が存在するが、石室の石とは関係のないものと思われ、石室形態は不明である。

(長尾)

(g) 雲雀山西尾根B支群15号墳

＜墳丘＞ (第6図)

当古墳は14号墳の北西、標高約72mに位置する。

墳丘は北斜面に削平がみられるが、南斜面は比較的旧状を保っている。今回の地形実測調査によると径約8mの円墳で、墳丘高は約1mであると思われる。

＜石室＞

簡単なボーリング探査の結果、石室を構成すると思われる石が遺存しているが、その形態及び規模は不明である。尚、墳頂付近に大型の石が2個存在しているが、石室を構成するものであるかどうかは不明である。

(伊東・松林)

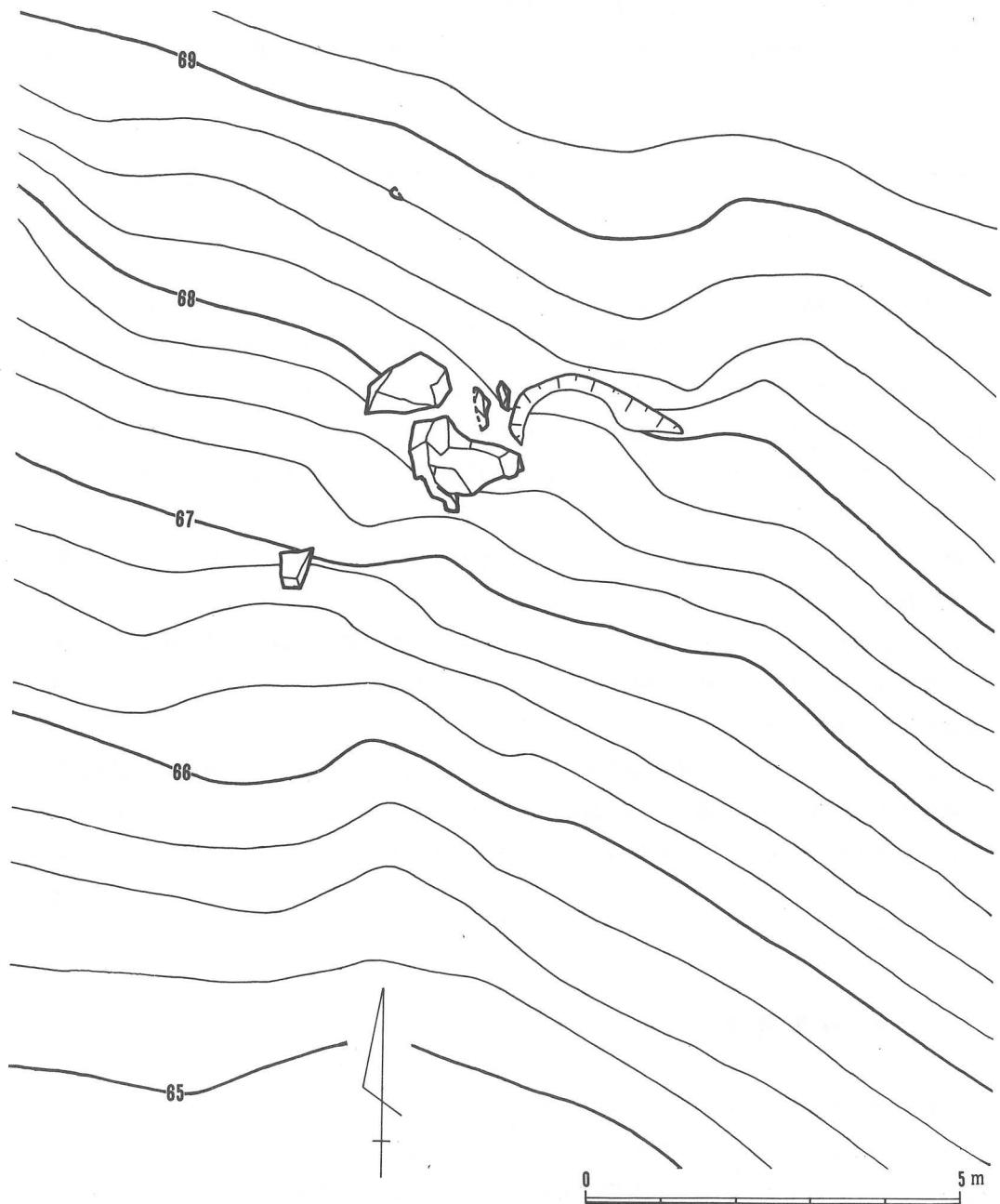
(h) 雲雀山西尾根B支群16号墳

<墳丘> (第10図)

当古墳は標高約68mに位置し、西から東に延びる尾根の南斜面に築造されている。

墳丘は封土の流出が著しく、特に墳丘東部は封土が大きくえぐり取られ、裾部も石室下部より削平をうけて急斜面を呈しており旧状を保っているとは言い難く、墳丘の規模及び形態は不明である。

<石室>



第10図 雲雀山西尾根古墳群B支群16号墳地形実測図

現状では天井石と思われる石2個が露出している他、石室を構成すると思われる石2個がそれぞれ一部露出している。簡単なボーリング探査によると、それらの付近にも石の遺存が認められるが、石室規模は明確にはしえなかった。

(松林)

(i) 雲雀山西尾根B支群17号墳

〈墳丘〉(第6図)

当古墳は15号墳の南西、標高約67mに位置する。

墳丘は封土の流出が著しく旧状をとどめているとは言い難く、墳丘の規模及び形態は不明である。

〈石室〉

残存状態は極めて悪く、風化をうけた石2個が露出しているのみであり、石室の規模及び形態は不明である。

(佐々木)

(3) 小 結

上記した9基の古墳は雲雀山西尾根の南斜面にある。4・13・14・15号墳の4基は北から南に延びる尾根上、標高約65m～68mに南東から北西にほぼ一直線上に並び、4号墳の西に5号墳、14号墳の西に17号墳がある。16号墳はこれら6基から西に約150m離れた東から西に延びる尾根の南斜面の標高約68mに位置し、11号墳は東に約120m離れた標高約65mに、3号墳は約50m離れた標高約64mに位置する。

墳丘の形態は、11・13・14・15号墳は遺存状態が良好で円墳であることが確認でき、4号墳は石室が露出し、更に石室内に天井石が落ち込んでいるが円墳であるといえる。3・5・16・17号墳は封土流出が著しく、特に5号墳は人為的削平を受けており墳丘の規模及び形態は不明である。

内部主体は4号墳が右片袖式の横穴式石室であり、3号墳が小型の箱式石棺であること以外は現状からでは確認しえなかった。

なお、11号墳はボーリング棒による探査を行ったが内部主体は確認されておらず古墳ではない可能性がある。また、17号墳は今回の調査中に発見されたもので、簡単なボーリング探査で石の存在が確認されているが、石室を構成する石であるかどうかは不明であり、古墳ではない可能性がある。

(森澤)

VII 採集遺物

今回の調査中に若干の遺物を表面採集したので報告しておく。

採集された遺物は須恵器・土師器であるがいずれも小破片であった。須恵器のうち2点は5号墳付近で採集されており、いずれも甕の体部で、1つは器表はタタキののちヨコナデで消し、内面は同心円文叩目がみられ、もう1つは器表は自然釉を呈し、内面は同心円文叩目がみられるが、

時期を明確に比定できるものではない。

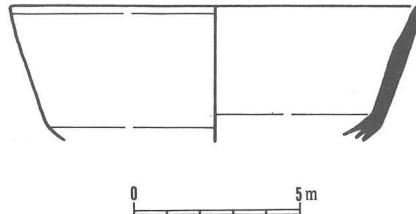
平井窯跡については、1915年の笠井新也氏の報告では7世紀後半、最近では浅岡俊夫氏の報告では7世紀中葉頃の須恵器の窯とされているが詳細は不明である。今回、窯跡周辺において若干の須恵器片を表面採集したが、実測が可能なものは浅岡氏報告のいう第二窯跡付近で採集した坏身口縁部の1点のみである。坏身は口径6.1cm、残存高4.1cm、口縁内外面ともヨコナデで調整しており、焼成は良好である。高台が付くか否かは不明であるが、時期は7世紀後半頃に比定できよう。（第11図）

なお、採集遺物は全て関西学院大学考古学研究会が保管している。

（松林）

＜註＞

- ① 笠井新也「摂津国川辺郡平井山に於ける古代製陶所の遺蹟及びその遺物」『考古学雑誌』第5巻第9号 1915年
- ② 浅岡俊夫「宝塚市平井窯跡分布調査報告」『大阪文化誌』第14号 1982年



第11図 採集遺物

VII まとめ

今回の調査をもって、当研究会による雲雀山西尾根古墳群B支群の墳丘測量調査及び実測調査は、ほぼ終了したと言える。今考えられることを列挙すれば以下のようになる。

① 本支群の内部主体は、有袖式の横穴式石室、無袖式の横穴式石室、小型の箱式石棺に分類できる。2・4・9・10号墳は有袖式の横穴式石室であり、1号墳は無袖式の横穴式石室、3号墳は小型の箱式石棺である。なお、6・7・8・16号墳は有袖式の横穴式石室、5・13・14号墳は無袖式の横穴式石室である可能性が強い。11・12・15・17号墳については不明である。

② 本支群は、6世紀の中葉に造墓が開始され、少なくとも7世紀の前半までは造墓が行われたと考えられる。^③長尾山の各古墳群を構成する支群（支群に分けられていない中筋山手古墳群は古墳群=支群として扱う。）が、多くは6世紀型か7世紀型の古墳どちらか一方のみによって構成されているなかで本支群のあり方は注目される。また、これに加えて6世紀型と7世紀型の古墳が混在する支群においてもどちらかが極端に少ないとなどから、長尾山の古墳群においては1つの支群は6世紀型か7世紀型の古墳どちらか一方のみによって構成されるのが一般的であると思われる。

③ グループ分けは難しいが、6・7・8号墳、9・12号墳、4・5・13・14・15・17号墳は、それぞれ1グループをなすかもしれない。

今、我々に言えることはこれだけであるが、少しでも長尾山の古墳群の性格解明に役立つことを願って終りとしたい。

（白江）

〈註〉

- ① 1・2号墳は、1972年宝塚市教育委員会によって発掘調査された。（『雲雀山古墳群』宝塚市文化財調査報告第6集 1975年）
- ② 上記註①文献によれば、2号墳は6世紀中葉とされる。
- ③ 白石太一郎「畿内における古墳の終末」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第1集 1982年）によれば、箱式石棺は7世紀第3四半期から一部第4四半期まで下るとされる。
- ④ 宝塚市教育委員会『長尾山の古墳群調査集報』（宝塚市文化財調査報告第14集 1980年）

—— 関西学院考古既刊 ——

- 創刊号 内部学習会の資料集（贋写版）（本文34頁）在庫なし
- 第2号 関西学院構内古墳現状・遺物報告 関西学院大学考古学研究会（本文32頁、図版7葉）在庫なし
- 第3号 仁川流域の後期古墳 関西学院大学考古学研究会（本文24頁、図版13葉）在庫なし
- 第4号 長尾山の古墳群I） 関西学院大学考古学研究会、西宮市甲風園採集の弥生式土器
折井千枝子・坂井秀弥、横穴式石室の平面形について 岡野慶隆（本文28頁、図版17葉）在庫なし
- 第5号 長尾山の古墳群II）・西宮市獅子ケ口の須恵器・関西学院構内採集の須恵器 関西学院大学考古学研究会、雲雀丘学園所蔵の長頸壺 坂井秀弥、猪名県と畿内の県
岡田務（本文34頁、図版8葉）頒価¥ 900
- 第6号 滋賀県東浅井郡浅井町北野遺跡発掘調査概要報告・長尾山の古墳群III） 関西学院大学考古学研究会、宝塚市雲雀丘古墳群C北群4号墳出土の須恵器 直宮憲一、西宮市満池谷墓地内奥塚古墳について 古川久雄、五色塚古墳出土の古式土師器とその編年的位置づけ 兼康保明、横穴式石室の平面企画について 岡野慶隆（本文82頁、図版13葉）在庫なし
- 第7号 池の沢庭園遺跡発掘調査概要 兼康保明 納谷守幸 木谷秀次、古墳のあるキャ
ンパス 武藤誠、水田址からみた初期の稻作技術について 坂井秀弥、書評-黒崎直「近畿における8・9世紀の墳墓」岡野慶隆（本文32頁）頒価¥ 700
- 送料は1冊につき200円、2冊まで250円、4冊まで300円です。